牧水祭記念号

東郷村報

第168号

昭和40年9月5日
発行所
宮崎県東旧杵郡
東郷村役場

在りし日の若山牧水先生

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長　黒木松美

九月十七日は若山牧水先生の第三十七回忌にあたりますので、本年も「牧水祭」を行ないまして、先生の御遺業をしのぶことにいたしました。

明治、大正、昭和の歌壇を通じて牧水先生ほど広く一般から敬愛されている歌人は少ないでしょう。昭和三年沼津千本松原の蔭の家に長逝されてからすでに三十有七年、先生の歌は益々ひろく愛誦され、

幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

白鳥はかなしからずや空の青海の青にもそまずただよふ

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花

というようなその代表作は今やほとんど知らぬ者は無いという位までになりました。

特に最近は先生に対する研究も盛んで、先生に関する著書も多く刊行されています。先生の歌碑、詩碑も北は北海道から南は鹿児島に至る先生ゆかりの地に建てられて、その数四十をかぞえています。牧水先生こそは日向の最大の誇りであり、先生を生んだことによって東郷村は永遠に文化日本の聖地の一つとなったのであります。

この偉大なる歌人の生家をはじめ遺墨遺品等を長く保存して我国文化の進展に寄与することは吾等郷土を同じくする東郷村民に課せられた貴い文化事業でありまして、この事業遂行を目的として牧水顕彰会が組織されましたのは昭和二十六年九月であります。爾来いつの日にかはこの目的を達成したいと夢寐の間にも念願しつゞけてまいりました。

幸いにも今回所有者の陶山氏の好意によりましてこの目的を達成することが出来まして、生家並に裏山等一切を顕彰会に譲っていただく事になりました。

この生家は弘化二年に牧水先生の祖父が建てられたもので、すでに百二十年を経ています。従って腐朽度も高く、又今後永く保存する上からもこの際大修理を施しますと共に、歌碑を含めた環境整備、或は遺墨遺品の保存など考えますと数百万円という多額の経費を要します。

この大事業を遂行する資力は顕彰会にはありませんので村民各位をはじめ、県内外の有志の方々の御協力をいただきまして、生家保存の万全を期したいと希念いたしています。

これが具体的計画につきましては別途趣意書をお送りいたしますので、何卒特別の御協力を賜りますよう懇願申します。

牧水先生の一生

牧水先生は明治十八年八月二十四日、坪谷に生まれた。坪谷は耳川の支流坪谷川流域の溪谷、現在では日向市から乗合自動車で簡単に行け、その生家前には停留所まで出来ていてかなり便利になって居るが、当時はまったく近代文化から取り残された山間の僻村であった。牧水先生の「おもひでの記」にはその郷里について次のように記されて居る。

「私の生れた村、詳しく云へば日向国宮崎県東臼杵郡東郷村大字坪谷村は山と山の間に挟まれた細長い峡谷である。ことに南には附近第一の高山である尾鈴山がけはしい断崖面を露はして眼上に聳へてゐるので、一層峡谷らしい感じを与へて居る。村の長さは東西に延びて四五里もあるだらうが、戸数は僅か二百か三百足らずのものであると思ふ。私の家はその一番戸であった。（今は三番地と呼ぶ事になってゐる相だ）つまり村の東の入口に当ってゐる。此処に新たに家を建てた事に就いても私は租父を並ならぬ人の一つに思はざるを得ぬのである。それはその場所が附近でも際立って優れた好位置にあるからである。或は他に理由があったか、若しくは偶然であったかも知れぬが、私には矢張りそれが彼に山川を見る眼があった故だとのみ思はれてならない。家は村を貫通する唯一の道路に沿ひ、真下に溪に臨んで居る。そして恰度その溪は其処だけ豊かな淵となり、やがてまた瀬となって下に走り、斜め右と左とに末遠くその上下の溪を展望する事が出来る地位にある。彼はその自家に名づけて省淵廬と呼んだ。謄写入の箱などにまで省淵廬々々と書き散らしてある。そして村の停望の基調を成してゐる尾鈴山をば殆んど正面に、而してまたやや斜めにその全體を眺め得る様な地位に当って居る。晴れた日も悪くはないが、私の家の眺望は雨の日が特にいい。それは雲と山との配合が生きて来るからである。元来この尾鈴山はその南面の太平洋に臨んだ方が極めてなだらかな傾斜で高まって来て四千尺近い頂上となり、急に北に面して削り落した様に岩骨を露はしながら嶮しく切れてゐるのである。常に陰影の多いその山の北面には、晴れた日でもよく雲を宿してゐるが、一朝雨降るとなると山全體が、いやその峡谷全體が、真白い雲で閉されてしまふ。そしてその雲の徂徠によって到るところ襞の多いその嶮山が恰も霊魂を帯びたかの様に躍動して見へるのである。」

坪谷の風光がいかにもよく写されて居る。

先生の生まれた明治十八年八月二十四日は「おもひでの記」には陰暦ではお盆の十六日に当っていたそうだとあるが、暦を検べてみると、家際は七月十五日の朝で、後ろの山続きになっている東の丘の上からすがすがしい夏の朝日が板縁に流れて来はじめた頃であった。

当時、父立蔵は四十一歳、母マキは三十八歳であった。そして先生には、スエ、トモ、シズ（本名キワ）の三人の姉があり、上の二人はもう十八と十六とだったが、彼女たちはその愛読していた「東京絵入新聞」の続き物築一曳編「朧影墨書筑波根」の女主人公の名から思いついて可愛い弟に繁という名をつけた。何しろ初めての男の子のことて先生は随分可愛がられて大切に育てられた。

ところが、先生の五歳の年に父立蔵は一家を挙げて隣村西郷村田代の小川という戸数百戸ばかりの部落に移って行った。坪谷よりもっと深い山奥だが、そこにはずっと以前から若山医院の出張所が設けられていて立蔵は時々そこに出かけていたのである。牧水先生はそこで八歳の春を迎え小学校に入学したが、学校は一里近くも離れていて子供の通学には不便だったので、先生は殆んど登校しなかった。そして二番目の姉トモの主人今西吉郎が校長をしている東郷村羽坂尋常小学校に転校し、山陰の叔父純曾の家から通学することになったが、それもしばらくで田代の家に引取られ、その秋あたり一家と共に坪谷に引揚げ、坪谷尋常小学校に入学した。学校は小さなもので同級生も男女合せて二十人位、その中で先生は成績優秀な模範児童であった。「おもひでの記」には寺の住職であった叔父のことを記し（これは母マキの異母妹の主人昌福寺の金田大珍という人）その叔父の持って来る新聞に載っていた村井弦斎の「朝日桜」を読んだのが生まれて初めての小説だったことを記してあるが、「朝日桜」は日清戦争中の明治二十八年一月二日から『報知新聞』に連載されて居るから、牧水先生十一歳の時だったわけである。

明治二十九年三月坪谷尋常小学校を卒業したが、当時附近にはどこにも高等小学校がなかったので、父母の膝下を離れ十里ばかり離てた延岡に出て延岡高等小学校に入学した。そして土地随一の文章家として知られた受持の教師日吉昇に愛され、二年頃から村井弦斎の「小猫」だとか「桜の御所」だとかいうような小説に読み耽るようになった。

明治三十二年春小学三年を修業した年初めて延岡に県立中学が設立されたので入学試験を受けて及第、延岡中学生となったが、二年生頃から盛んに文学書に親しむようになり、三年生になってから散文を書いたり歌や俳句を作って校友会雑誌に出したりまた『中学文壇』その他雑誌に投書をはじめ、三十五年には級友たちと「曙会」を起して『曙』という回覧文学雑誌を出し当時宮崎から出ていた『日州独立新聞』に盛んに投書を初め翌年からはまた『野虹』という回覧の短歌雑誌を出したりしはじめた。中学時代の先生は「桂露」「雨山」「白雨」「野百合」というような雅号を順次に用いていたが、三十七年の初めあたりから「牧水」を使いはじめた。母親の名マキと水と、当時最も愛していたもの二つを取ったのである。

明治三十七年春、二十歳で中学を卒業、四月上京して早稲田大学文学科高等予科に入学し、まもなく尾上柴舟先生を訪ねて師事、やがて柴舟先生を中心に正富汪洋、前田夕暮等と車前草社を結び、主として雑誌「新声」にその作品を発表するようになった。その頃先生は将来は小説家として立とうと考え、しきりに短篇小説など書いていたが、恰度文壇は自然主義の嚆頭であったので、その時のみの影響を受け、そのため歌も現実を直写する清新な詠風に変わり、それが次第に歌壇の注目を受けるようになって来た。

処女歌集『海の声』の出版されたのは二十四歳の明治四十一年七月、早稲田大学英文科卒業と殆んど同時であった。「幾山河」「白鳥は」その他初期の有名な歌の多くを収めて居るのだが、妙な事情で途中から自費出版となり宣伝など出来なかったため、一般から殆んど認められず、明治四十三月一月に出た第二歌集『独り歌へる』も更にみじめな状態で出版されたため、問題にならなかった。

ところが、その直後の四十三年四月、東雲堂から出版された『別離』によって一躍歌壇の花形となり、同じ柴舟門下の前田夕暮と共に与謝野鉄幹、同晶子夫妻の新詩社の歌風が衰えかけていた歌壇に新しく牧水・夕暮時代を劃するに至った。

こうして先生は最初から歌人として出発した。勿論歌を作ることだけで生活して行くことは不可能なので四十二年七月には中央新聞社社会部に入ったが年末には退社、また四十四年十二月にはやまと新聞社会部記者となってみたがこれも二ケ月足らずでやめ、その後はどこにも就職することなく、その一生を殆んで歌のために捧げ尽したのであった。

早稲田在学中の先生は明治三十八年・三十九年・四十年と暑中休暇には大抵帰省して居り、卒業した年も九月に一度ちょっと帰って居るが、それからしばらくは帰る機会がなかった。

先生が喜志子夫人と結婚したのは明治四十五年五月であったが、その年七月下旬には父危篤の電報に接して取るものも取りあえず帰省した。父の病気はしばらく小康を保っていたが、十一月十四日行年六十八で遂に長逝した。先生は七月の帰郷以来近親たちから郷里にとどまって就職することを勧められたが、父の死後は更に強くそれを求められて進退に迷い、翌大正二年五月遂に意を決して出郷するまでひどく苦悶懊悩していた。第六歌集『みなかみ』所載の破調の歌はその頃の作である。

その後の先生は常に歌壇の第一線にあって活躍していたけれど、詩人の常としてその実生活は甚だ恵まれず、非常な母親思いでありながら故郷の家に貧しい生活をしている母親に僅かのお小遣を送る余裕さえない始末だった。大正九年あわただしい東京の生活を切りあげて静岡県沼津に移ってからは日々の生活がいくらが落ちついて来たし、またその担当する全国諸新聞雑誌の選歌が次第にふえて来たため収入もいくらか多くなって来たので、大正十年頃からは何とかして母親を沼津に引取って一緒に暮そうと考えるようになり、屡々その相談をしてやったりしたが、年老いても気丈な母親はなかなかそれに応じようとはしなかった。

かれこれするうちに大正十三年になった。先生は亡父十三回忌の法要を営むために十二歳になる長男旅人をつれて沼津を発った。他に用事もあったので福岡、長崎、熊本、鹿児島の諸県下を廻って、坪谷の家に帰りついたのは三月二十七日夕方であった。父の病気の

（二面へつづく）

私は常に思っている。人生は旅である。われらは忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往ってしまう。

その間の一歩一歩の歩みは、実に、その時のみの一歩一歩で一度往いては、ふたたびかえらない。

私は私の歌をもって、私の旅のその一歩一歩のぴひきであると思いなしている。いいかえれば、私の歌はその時々の私の生命の砕片である。

——独り歌へる——

友よ、歌をうたわん。
わが生のあかしのために。
いのりのために
われみずからの小さき知恵にたよるな。
おのれを空しゅうして
ただ神の前に立て

○

おのれだにきよからば
路傍の草に神を見む
おのれだにきよければ
随所に輝く歌を見る

——ひとりごと——

ために帰省しその死後上京したのが大正二年であったから、実に満十一年ぶりの故郷であった。古来、偉人は多くその故郷に容れられないという。先生にも多少そうした傾向がないではなく、最初のうち先生は遠く離れていても常に村人たちの冷たい眼を感じていたが、この頃はもう先生の名もようやく故郷の人たちに認められて来ていたのである。三月三十一日附の喜志子夫人宛の手紙の中に

『驚いたのは小生の帰ったことで、日に幾人となく人たちが押掛けて来るので来れば即ち酒で、これには閉口しきってゐる。この四月三日には東郷村（坪谷のほかに大字が三つある）全体としての歓迎会が開かれるのださうだ。何だか滑稽にさへ考へられる次第だが御無理御尤もで服従するほかない有様だ。』

と記されて居るが、その村人たちの歓迎会は予定通り四月三日夜村内の船山旅館という小さな旅人宿で開かれた。初め発起人たちが相談に来た時、先生はその厚意を謝した後、自分の今日あるは殆んど皆母の力であるから、恐縮だが母をも一緒に招待して貰えないだろうかと申し出た。勿論それは快諾されて、当夜は母親と共にその晴の歓迎会に臨んだのであった。発起人を代表して坪谷郵便局長、那須九市氏の歓迎の言葉があり、先生も鄭重な謝辞を述べたが、出席者は坪谷の人たちを主に村内の有志旧友たち三四十名、村としてはまことに空前の催しであった。牧水先生の感慨もさることながら、共にその席に列した老母の感慨はどうであったろうか。会が終り発起人たちと共に家に帰るとそこには鹿児島方面の弟子数名と、村の文学好きの青年たちが待ち構えていてすぐにまた酒になったが、上機嫌の先生は一同の望むがままに立ち上って自作の

「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり」を朗詠しはじめたが、「かなしさよ」まで朗々とやって来たとき、急にぴたりと声を呑んでしまい、一同がいかにせがんでも遂にその歌の続きをやらなかったという。思いがけぬ村人たちの歓迎会に臨み、その席から帰ったばかりの先生は恐らく十余年前その歌を作った当時のさまざまなことを憶い出して万感こもごも胸に到り、ひそかに涙を呑んだのであったろう。

とにかくこの時の帰省はいわば故郷に錦を飾ったものであり、いま坪谷神社に残って居る、

久し振に故郷に帰り来れば旧友矢野伊作、富山豊吉の両君この板を持参して氏神に奉る歌書けといふすなはち氏子の一人　若山牧水

うぶすなのわが氏神よとこしへに村のしづめとおはすこの神

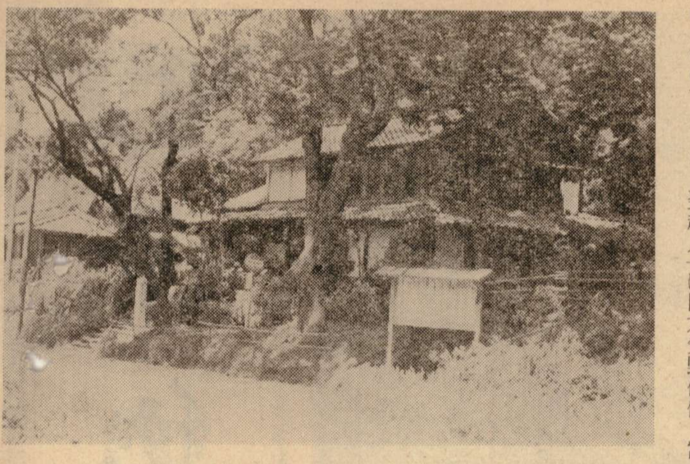
という額や、裏面に「矢野寅吉おぢやんに贈る歌

おとなりのしげ坊」

という愉快な短冊などの揮毫もこの時の滞郷中で、まったくこれこそは先生の一生一度の晴の帰郷だったといってよかろう。

四月十二日には父の十三回忌の法要を営んだ。そして老母を口説き落して沼津まで連れ出すことに成功し、四月十六日の朝、馬車で故郷を発ったが、老母は沼津滞在一カ月ばかりでまた坪谷に帰った。

牧水先生はその後短冊半折等の揮毫頒布会を各地に催して得た金で沼津千本松原の蔭に土地を買い家を建て、以前からずっと主宰発行していた『創作』の他に詩歌綜合雑誌『詩歌時代』を発行したが、その雑誌のため少なからぬ負債が出来、更にずっと揮毫頒布旅行を続けねばならなくなり遂に北海道朝鮮まで出かけた。先生がその次に帰省したのは昭和二年の朝鮮旅行の帰途、大分延岡での揮毫頒布会をすましてからで、七月二十五日に喜志子夫人同伴で坪谷に帰ったのであったが、この時は非常に疲れきっていて半病人の有様それでも父の墓参りをしたり郷里の写真十数枚を撮らせたりなどして二十九日土々呂港を出帆したが、これが最後の帰省であり、翌三年九月十七日、沼津千本松原の蔭の家で永眠、同地浜道、乗運寺の墓地に埋葬されたのであった。（年令は数え年）



牧水先生の生家

歌は心から出るという。まことに心よりほかに、歌のいずるところはない。

心から出るとともに、同時にまた心を養い育つるような心持で、次第に私は、歌をうたって行きたいものである。

自由で
長閑で慈愛にみちた歌
私はそれを歌いたい

――ひとりごと――

牧水とその歌碑

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり

郷土の人たちによって建てられ昭和二二年一一月一七日に除幕式を行った。

なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ幼なかりし日ききし如くに

延岡の城山頂上に昭和一〇年三月に建てられた。昭和二年七月朝鮮旅行の帰り延岡に寄り谷邸に泊った牧水が小学生、中学生のころいつも聞いていたその鐘を聞いて、なつかしさにたえずこの歌をつくった。

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花

牧水の母校旧県立延岡中学（現、延岡高校）に昭和三十二年九月十七日に建立

ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへるかの岡の上に

細島の御鉾ケ浦に昭和三十六年七月建てられた。お秀は牧水が早稲田大学時代に、女子大学生で非常な才媛、同郷人であるし文学的な趣味もあったので親しい間柄であった。ひでは病気で明治四十年帰郷する途中大阪で死亡、この歌は牧水の歌集「離別」所載のもの

海よかげれ水平線の黝みより雲よ出で来て海わたれかし

昭和三十八年九月美々津権現崎に建設

美々津は牧水が生れて初めて海というものを見た感激の地である。歌集「みなかみ」には、ここでつくった歌がたくさん収められているこの歌はその中の一首である。

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

高千穂峡に昭和三八年四月建設

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり

都農町の駅前に昭和三六年七月除幕、都農町には姉が河野家にとついでいたため、牧水にとっては縁故の深い地

日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端にひとり海見る

日南都井の岬に昭和二二年九月除幕、牧水が二十一才の夏、帰省中に、都井村に出かせぎに来ていた父を訪ねたときの作

有明の月は冴えつつ霧島のやまの渓間に霧たちわたる

大正一四年一二月、霧島栄之尾温泉に建設

新墾（にひはり）のこの坂路の裾とほし友のすがたの其処ゆ登り来

われ三たび此処に来りつ家のあるじさび定まりて静かなるかも

ともに北九州市戸畑に昭和三六年五月に除幕

窓前に瀬戸はいつしか瀬となりぬ白き浪たちほととぎす啼く

愛媛県岩城島に昭和三八年一〇月除幕、岩城島は牧水の古い門下三浦敏夫の住んでいるところ、牧水は大正二年五月、郷里の家を出て上京する途中に訪問

鴉島（からすじま）かげりて黒き磯の岩に千鳥こそをれ漕ぎよれば見ゆ

山口県柳井市鴉島に昭和十九年夏完成、鴉島の磯の岩に刻まれており、この岩は干潮のときは島続きとなり満潮には海中に孤立する島。この歌碑の出来た由来は大悟法利雄氏著の「若山牧水」によると

「元来この島は無人島で戦時中は軍の敵前上陸の練習地として使用されていたのを、所有者の村上家から軍に献納したところ、軍でもお礼に何かしてあげたいということになり、それでは大正一四年秋に若山牧水が来遊したときの歌があるから、記念の歌碑をつくってもらえないだろうかという村上家の申し出により、西部軍がつくってくれたというのもいわくつきのもの」と記してある。

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花

名古屋市熱田市宮中学校庭に昭和一一年一一月除幕

仏法僧々々と啼く鳥の声をまねつつ飲める酒かも

愛知県鳳来寺山に昭和三四年建設。鳳来山は霊山として古くから仏教方面で知られた山、牧水は大正十二年七月に、仏法僧をききためその山に登った。大正十五年再び出かけている。この歌碑は独立して建てられたものでなく、道ばたの岩に彫りつけられている。

釣りくらし帰れば母に叱られき叱れる母にわたしき鮎を

愛知県新城市昭和三五年四月除幕

新城には牧水が沼津で非常に親しくしていた青年が病気で、そこに帰っていたのを見舞ったり、青年の死後墓参したり前後三回訪ねたとき書き残していった「釣くらし……」の歌が歌碑となった。この歌はここでの作ではなく少年時代の追憶「鮎つりの思い出」の中の一首である。

恵那（えな）ぐもり寒けき朝を網はりて待てば囮（をとり）のさやか音（ね）になく

岐阜県中津川市に昭和二五年一〇月除幕、牧水は大正一〇年一〇月末、ここに遊んだが、そのころここは小鳥をとるかすみ網の網場で、牧水はそのかすみ網に興じ、歌をつくり酒を楽しんだのであった。

のぼり来て平湯峠（ひらゆたうげ）見ゆはるかす飛騨の平に雲こごりたり

岐阜県平湯峠に昭和三八年一〇月除幕

平湯峠は乗鞍岳や焼岳にも近く海抜一、六八四米の高さにある。

かたはらに秋草の花語るらくほろびしものはなつかしきかな

長野県小諸市の城跡の古石垣に刻まれている。昭和九年一一月の除幕。小諸は明治四三年秋漂泊の旅に出た時滞在したところ。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

長野県浅間町の佐久酒造会館の庭に昭和三三年一〇月に除幕。

見よ旅人秋も末なる山々のいただき白く雪つもり来ぬ

長野県蓼科牧場に昭和三三年六月建設。

山出で来て尾長の鳥のあそぶらむ松代町の春をおもふよ

長野県松代町、昭和三八年五月除幕。松代町は佐久間象山で知られた古い城下町。牧水は大正一四年春、この松代町に遊んだ時、家ごとに植えられた、まっさかりのあんずの花に、たくさんの尾長鳥の群れ遊んでいるのを見たが、翌年の春それを思い出しての作品。

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

牧水は昭和三年九月、沼津千本松原の陰の家で長逝した。その直後、土地の有志や門人たちによって歌碑建設が計画され、翌四年七月に除幕、歌碑は牧水が好んで散歩した松原の道の近く沼津公園にある。

香貫（かぬき）山いただきに来て吾子（あこ）とあそび久しく居れば富士晴れにけり

沼津市香貫山に昭和三五年九月建設。

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり

静岡県三島町、除幕は三四年一二月。

わが泊り三日四日続きゐつきたるこの部屋に見る冬草の山

静岡県土肥温泉、昭和三七年六月建。

伊豆西海岸の土肥温泉は牧水がひどく気に入った静かな温泉で、正月などよく出かけて長滞在をしたところ。

甲斐のくに小淵沢あたりの高原の秋末つ方の雲のよろしさ

山梨県小淵沢に昭和二四年一一月除幕。

立川の駅の古茶屋さくら樹のもみぢの蔭に見送りし子よ

東京都立川駅前、昭和二五年一二月除幕。

この歌は明治三九年一〇月、友人土岐善麿とふたりで武蔵野を歩いたときによんだもの。当時牧水は二一才、まだ早稲田大学の学生時代。

しらじらと流れて遠き杉山の峡の浅瀬に河鹿鳴くなり

埼玉県飯能市、昭和三六年六月除幕。

秩父町出はづれ来れば機織（はたおり）の唄（うた）ごえつづく古りし家並に

埼玉市秩父市、昭和三一年除幕。

乾きたる
落葉の中に栗の実を
湿りたる
朽葉かしたに橡（とち）の実を
とりどりに
拾ふともなく拾ひもちて
今日の山路を越えて来ぬ
長かりし今日の山路
楽しかりし今日の山路
残りたる紅葉は照りて
餌に餓（う）える鷹もぞ啼きし

上野（かみつけ）の草津の湯より沢渡の湯に越ゆる路名も寂し暮坂峠

群馬県暮坂峠、昭和三二年一〇月除幕。

暮坂峠は草津温泉から沢渡温泉に越える海抜一、〇八六米の峠で、この詩は大正一一年晩秋に信州上州地方を旅行したときつくった「枯野の旅」と題する一連の詩の最初に出ているもの。

しら鳥はかなしからずや空の青海のあをにもそまずただよふ

横須賀市下浦海岸、昭和二八年文化の日除幕。

「歌　碑」

わが庭の竹の林の浅ければ降る雨見れば春は来にけり

川崎市柿生に昭和三七年一一月建設。

時をおき老樹（おいき）の雫（しづく）おつるごと静けき酒は朝にこそあれ

福島県三春町、昭和二五年八月建設。

ひっそりと馬乗り入るる津軽野の五所川原町は雪小止（をや）みせり

橇（そり）の鈴戸の面（も）にきこゆ旅なれや津軽の国の春の曙

青森県五所川原町、昭和二七年一一月建設。

大正五年三月末、牧水は五所川原に住む門下生をたづね、大釈迦駅から馬に乗せられて雪の中を五所川原町に入った。

幾山河こえさり行かば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

北海道幕別町、昭和一二年五月建設。

この歌碑の建てられている幕別町は十勝平野のある帯広市郊外にある町、大正一五年一〇月、北海道旅行中の牧水夫妻が疲れを休めるため黒田温泉に滞在した。その記念にたてられたもの。

三九年には山口市の瑠璃光寺に

はつ夏の山のなかなる古寺の古塔のもとに立てる旅人

が建てられ、昨秋は「幾山河」の歌碑が岡山県哲西町に建てられた。

哲西町二本松峠で「幾山河」の歌は作られたのである。

輝け
ひややかに輝くと火のごとく輝くとそは、その人の本然による。
とにかく輝け。
歌は輝くところよりのみ生る。

――ひとりごと――

牧水祭行事

一、学童音楽会　九、〇〇～一一、〇〇
二、歌碑祭　一一、〇〇～一二、〇〇
三、記念講演　一三、〇〇～一四、三〇
四、祝賀会　一五、〇〇～一六、〇〇
五、学童作品展　九、〇〇～一六、〇〇